
ルビードラゴン

朋美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルビードラゴン

【Nコード】
N9561M

【作者名】
朋美

【あらすじ】
剣と魔法の世界、レクサンドロス。
平和と繁栄を謳歌していたその世界にも滅びの予兆が見え始めていた。

多くの賢者によって警告がなされ王たちは優秀な冒険者を求めた。

「世界を救う者よ混沌に立ち向かえ」

勇者たちは自ら危険に飛び込みそして倒れていった。

悲報と引換にもたらされた情報…。

古代の邪神ラングースとその配下四匹のカオスが蘇りつつある。

王たちは結束し勇氣ある者に命じた。

「邪神の復活を阻止せよ。褒美はなんなりと与える」

竜使いの一族に生まれたタクヤは落ちこぼれであった。

15歳の契約の日に竜神との契約ができなかったのだ。

ひねくれて遊び呆けていたタクヤが18歳になった時朗報が舞い込んだ。

タクヤと契約したい竜神が現れたというのだ。

喜び勇んで竜神の祠に駆けつけるとそこで待っていたのは驚くほどの美少女だった。

第一話 契約の日

吐く息が白くなる季節。

景色も様変わりし樹木はほうきのように葉を落とす。

そんな季節の中で木枯らしよりも寒い男がいた。

タクヤ・ウッドビレ、18歳。彼女も友人もない無縁仏一歩手前の貧乏人である。

彼はなぜそれほど不遇なのか。その理由は3年前に遡る。

彼の生まれた家は名門中の名門、竜使いのウッドビレ一族である。

二千年前の聖戦時には光の勇者とともに魔王ラングースと戦ったという発祥伝説を持っている。レクサンドロス大陸を統治する4つの聖王家と対等の家柄なのである。

当然子供の頃から厳しく育てられた。学問は言うに及ばず、格闘術、古代語魔術、精霊魔法、神聖魔法……。圧倒的な詰め込み学習である。彼はその期待に十分すぎるほど応えた。どれも優秀な成績でこなし後は竜神から主として認められればいい。

そして契約の日。彼は一人で竜神の祠に向かった。ウッドビレ一族の直系で竜神との契約に失敗した者はいない。ウッドビレの祖先は聖戦時に竜神王の命を救ったのである。彼らはそのことに大変感謝しウッドビレ一族に僕として仕える契約を結んだ。人間よりも信義を重んじる竜神が約定を違えるはずが無い。

そして、タクヤが唯一の例外になった。彼と契約したがる竜神は一柱もいなかったのである。「ウッドビレの面汚し」彼はそれから罵られ続けることになった。当然性格は歪んでいく。度々問題を起こし両親からも縁を切られた状態である。友人も彼女もできなかつた。自分が野垂れ死んでも悲しむ者はいない。そう思い込むようになっていた。

「くそう！」

タクヤは酒の瓶を壁に投げつけた。ビンは砕けずに壁に穴が開いた。当然である今の彼はホームレスとして橋の下で暮らしていた。小屋の壁はバナナの葉っぱを貼り合わせた物である。

「竜神が何だ！そんなものはいらねえ！俺には拾ってきたエロ本がある」

自分を慰めようと住処の中を探り始めた。落ちているエロ本を拾い集めることが彼の日課になっていた。

「AK-47は太ももがエロいなあ……」

彼が住んでいるナトリ国では芸能活動が盛んで毎年のようにアイドルがデビューしていた。AK-47は最近になって人気が急上昇しているアイドルグループである。

「俺が竜使いになっていればこんなかわいい女を彼女にして自分好みに調教することも出来たんだ」

卑屈になったタクヤは歪んだ妄想を持っていた。かわいい女を調教したい。何でも自分の言う事を聞くように仕込みたい。彼の股間は憤り先走っていた。

「できますよ、タクヤ様。お久しぶりです」

突然声がして小屋の中に人影が現れた。瞬間移動してきたのである。現れたのは銀色の髪を持った神秘的な青年である。ただし人間ではない竜神である。

「お前はばあさんが使役してる竜神だな。何の用だ。俺に関わるな」タクヤは洗面で目をそらした。一族の者からは罵られ除け者にされているタクヤだったが竜神たちは意外と友好的だった。それが不思議なのだが何か隠し事をしているように感じるのだ。何人かの竜神に話しかけたがなぜタクヤと契約する竜神がいないのか説明してくれなかった。幼少の頃から竜使いとなるために厳しい修行に耐えてきたタクヤにしてみれば裏切られたと感じるのだ。

「お久しぶりでございますタクヤ様。族長リユウキの竜神コボルです。今日は良い知らせを持ってきました」

「なんだ彼女でも紹介してくれるのか」

タクヤは不貞腐れて腕を組んだ。まともにも聞く気がない。

「左様でございます。厳密に言えば違いますが」

竜神コボルは慇懃に答えた。その表情からは何を考えているのか伺えない。

「厳密についてどういう事だよ」

タクヤは疑わしそうな目を向けた。うまい話には裏がある。ホームレス生活で身につけた知恵であった。

「はい、説明します。タクヤ様と契約したいという竜神が名乗り出ました。うら若い女性です」

「まじで!？」

「はい、大真面目です。竜神は嘘をつきません」

タクヤは突然立ち上がると服を脱ぎ始めた。

「どうなさったのですか？タクヤ様」

「着替えるんだよ！こんな汚いナリじゃ会いに行けないだろう」

コボルは落ち着いていた。

「会いに行くのは良いのですが段取りがあります。まずは契約の儀式を済ませなければなりません」

「やつと俺にも光が差してきたぜ！ゴキブリのような生活とおさらばだ！早く会わせてくれ！すぐに契約だ！一刻の猶予もならん！」

「まあ、お待ちください。まずは族長のリュウキ様にご報告してからもう一度竜神の祠に行つて契約の儀式をしてもらうことになりま
す」

「竜神の祠だな！」

タクヤは皆まで聞かずに飛び出していった。
残されたコボルは軽いため息を付いた。

「まあ、あれほど望めばなんとかなるでしょう。リュウキ様にご報告せねば」

穏やかに笑つと瞬間移動して消えた。

タクヤはひたすら走っていた。ホームレス生活で体はなまりきつて

いたがそんなことは気にならなかった。竜使いになるという一度は諦めた夢が再び目の前に現れたとき彼の心は激しく逆流していた。暗い妄想から離れて勇者として人々の羨望を集める生き方がしたいと感じるようになっていったのだ。目標が手に届くようになった時人は変わるということである。

「待つてるよ！俺の竜神ちゃん！たつぷり可愛がってやるからなあ」

竜神の祠までは50Km以上あるので走り続けても到着するのは夜になった。タクヤは暗い山道を登っていく。三年前の契約の儀式で一度行つたきりの場所だが迷うことはなかった。驚くほどの集中力である。

間もなく祠の明かりが見えてきた。こんな時間に訪問するのはタクヤだけだろう。明かりをつけて待っていてくれたのか。彼の心は踊った。

祠の扉は押すまでもなくゆっくりと開いた。三年前には無かった事だ。

「竜神ちゃん！ご主人様の到着だよ！ん！」

タクヤは満面の笑みで飛び込んでいった。そのとたん明かりが消えた。

いやわずかに祠の奥が淡い光りに包まれている。タクヤは浮かれた気持ちを抑えてゆっくりと祠の奥へ歩みを進めた。明かりの正体がわかった。祠の奥に正座している小柄な人影が薄い燐光を放っているのだ。間違いない竜神だ。

タクヤは生唾を飲み込んだ。雰囲気でわかるこの女は上玉だ。ノーブルな気品と聖霊の様なオーラを感じる。彼はかすれた声で尋ねた。

「お前が…いや、君が俺と契約したいという竜神かい？」

小柄な人影は無言で頭を垂れた。

タクヤは一つ困ったことに気がついた。契約すればいい。それは分かる。だがどうすれば契約出来るんだ。疑問が口について出た。

「君と契約するにはどうすればいいんだ？」

小柄な人影が顔を上げた。まだ幼い少女だ。人間なら一二歳くらいだろうか。愛くるしい顔立ちをしている。彼女はうつすらと不思議な笑みを浮かべた。そのまま右手を上げる。次の瞬間祠の中が爆発した。

「な、なんだ!？」

降り注ぐ瓦礫がタクヤを直撃した。

少女は笑っていた。

「私と戦って勝てば契約成立。負ければ死ぬだけ」

タクヤは戦慄した。竜神の魔力は人間を遙かに凌駕する。三年間修行を怠けてホームレス生活をしてきた自分で勝てるのか。しかしやるしかなかった。負ければ死ということは逃げてでも死と言う事だろ
う。

「やってやるうじゃないか！」

タクヤは両手で印を結んだ。今は武器を持っていない。使えるのは東洋魔術だけだ。

「ノウマクサマンダバサラダンカン」

爆炎が渦巻きながら少女を取り巻いた。3千度を超える浄化の炎だ。竜神といえども無事ではいらぬまい。少女の服が燃え始めた。

「どうだ降参するなら助けてやるぜ」

タクヤは勝ち誇ったことを後悔した。

「竜の牙は混沌を砕く」

少女は炎に包まれたまま呪文を詠唱した。服は燃え落ちているが髪の毛一本も焦げていない。タクヤの魔法は少しも効いていないのだ。見えない牙がタクヤを襲った。勘だけで躲す。つもりだったが右腕を噛まれた。ボキリと音がして骨が砕ける。

タクヤの呪法が途絶えた。浄化の炎が消える。少女の幼い裸身が露になる。

「あなたは間違えてる。浄化の炎は邪心を持たないものには効かない」

「それなら!」

右腕の激痛をこらえ直し蹴りを放った。

少女は避けようとしなかった。蹴りは見えない障壁に阻まれた。彼女が冷淡に告げる。

「あなたが来る前にシールドの魔法をかけておいた。なんの準備もしてこなかったあなたの負け」

少女はゆっくりと手を伸ばすとタクヤを突き倒した。彼はとっさに手をつこうとして激痛にうめいた。

「痛いのか？」

少女はタクヤの服を脱がし始めた。

「何をするつもりだ！？まさか食べるのか？俺は三年も風呂に入っていないんだぞ！喰ったら死ぬぞ！」

少女はクスクスと笑った。

「あなたの名前を教えて」

「タクヤ・ウツドビレだ。短い人生だった」

「タクヤ…」少女はうつとりと呟いた「私はあなたと契約したい」「殺すんじゃないのか？」

少女はタクヤに身体を重ねてきた。胸もまだ膨らみきっていない幼い身体だ。それでも直に肌を合わせるとタクヤの脊髄に衝撃が走った。

「今すぐ殺すとは言ってない…」少女の温もりがタクヤの思考を麻痺させていく。

「私の真名はルビィ・アルゴ・プロログ」

タクヤは驚いた。竜神が真名を明かすことは支配を受け入れることだ。

「キスしてそれが契約」

第二話 暴れん坊プリンセス

季節はめぐって麗らかな日差しがサピアの花を色づかせていた。小川のせせらぎが心を和ませ、舞う様に飛ぶ蝶が花を賑やかにしている。

竜使いのタクヤとルビィは旅に出ている。それが習わしだからである。旅立つ前に族長から家宝の宝剣を授けられていた。ウツドビレ一族の始祖は神に愛でられた伝説の英雄である。その因縁でウツドビレ家の宝物庫には魔法の武器防具が大量に保管されていた。ウツドビレ一族の直系の子孫が竜神と契約し竜使いとなった時には魔法の武器が与えられる事になっていた。タクヤが選んだものは宝剣ライオットである。刀身にルーンが刻まれている魔法剣で雷撃の魔法が詠唱なしで使えるようになるのだ。国宝級の逸品である。

「くう」。この剣があれば世界征服だって出来るぜ」

タクヤは超ご機嫌だった。幼少からの夢であった竜使いとしての第一歩を踏み出したのだ。輝かしい未来しか見えなかった。

「片手では無理」

タクヤの傍らを歩いていたらルビィが冷徹な指摘をした。彼の右腕は石膏で固められ布で吊るされていた。ルビィとの戦闘で骨折してまだ治っていないのだ。

「うるさい！ 剣は振るえなくても雷撃は使える。俺は無敵だ」

2ヶ月前にルビィに殺されかけたとは思えないセリフである。3年間ホームレスをしていたと言っても彼の思考回路は超ポジティブだった。さすがは腐っても伝説の勇者の子孫である。

しばらく歩くとナトリ城下町に着いた。緑に囲まれた城塞都市である。街の中心にある丘の上にナトリ城があった。城の周りには三重の堀があり難攻不落を誇っていた。

「ここはセオリー通り酒場に行つて情報を集めよう」

タクヤは酒が好きであつた。ホームレスをしていた頃は僅かでも収入があればラム酒を買い拾い集めた工口本に囲まれて自分を慰める生活をしていた。名門の家に生まれながら墮ちるところまで墮ちていたのである。

ルビイがタクヤの目をのぞき込んだ。彼は澄んだ目に見つめられてどきまぎとした。ルビイは人間の年齢で言うところと12歳くらいに見えたが本性は竜神である。タクヤよりも長生きしているのは間違いない。

「まだ昼間、酒場は開いてない。先に登城するといい」
もつともな意見である。邪神ゲイエノラが蘇りつつあるという噂はゆっくりと人々の間に広がっていた。国民の動揺を抑えるためにナトリ国王は冒険者を集め邪神とその眷属の情報を集めさせていた。名門のウツドブレ一族なら当然国王の下に馳せ参じ邪神の討滅を誓わなければならない。ノーブレスオブリージェ、身分に伴う責任というものである。

しかし、タクヤは乗り気ではなかった。英雄としての名誉は欲しかったが危険すぎる冒険はしたくなかつたのである。もつとありていに言えば遊びたい盛りだったのだ。幼少の頃から厳しい修業に明け暮れそのあげくに挫折し、ホームレスにまで墮ちていたのである。楽しい思い出という物が乏しかった。

「ルビイ。もう少し町を見てみよう」

タクヤは爽やかに笑つた。傍らにルビイがいることが彼を強くしていた。名実ともに本物の竜使いなのである。自分は凡人ではない。彼は急速に自信を取り戻しつつあつた。

「……………」
ルビイは無言でうなづいた。

「まずは屋台を見ていかないか」

タクヤは上機嫌で彼女を促した。ナトリ城下町は商業が盛んで通りには雑多な個人商店が立ち並んでいた。眺めて歩くだけでも楽しそうだ。タクヤはふと思つた。自分とルビイは周りの人からどうい

ふうに見られているのだろう。恋人ではないだろう。やはり兄と妹か。まさか竜使いとその使役する竜神である事を見抜いている者はいないだろう。

「待てお前たち」

突然後ろから声をかけられた。女の声だ。女は続けた。

「竜使いタクヤ・ウッドビレと竜神のルビイだな。勝負しろ」

タクヤは後ろを振り向いてぼかんとした。何を言っているんだこの女は。

「人違いだ」

タクヤは面倒なことが嫌いである。足早に立ち去ろうとした。だが女は追いつがってきた。そしてタクヤとルビイの正面に回り込む。

「逃げようとしても無駄だ。おまえたちは監視されている。ここで勝負しろ」

タクヤは女の姿をまじまじと観察した。奇妙な格好をしている。顔を布で隠している。それはいい。正体を悟られたくないのだろう。よくあることだ。首から下は金属鎧を着けていた。

「春とはいつでも寒くないのか？」

タクヤは間の抜けた問をした。それほど覆面の女の鎧は奇抜だったのだ。

材質は黄金である。いやそう見せかけた真鍮かもしれない。

「ビキニアーマー」

ルビイが呟いた。驚いている風ではない。あるいはタクヤが初めて遭遇するだけでこういう露出度の大きな羞恥プレイ専門の鎧は珍しい物ではないのかもしれない。

「うるさい！ジロジロ見るな！とにかく勝負しろ！」

覆面ビキニアーマー女は剣を構えた。構えはなかなか様になっている。ただの露出狂ではなさそうだ。

タクヤは警戒したが今は利き腕が使えない。宝剣ライオットの雷撃は使えるが威力が大き過ぎてビキニアーマー女を殺してしまうかもしれない。

「ルビィ、なんかならないか？」

「殺すのか？」

ルビィは淡々と言った。右手を頭上にかざす。凄まじい魔力が凝縮される。空間が歪んで見えるほどだ。

先にビキニアーマー女が動いた。斬撃をタクヤに振り下ろす。良い判断だった。タクヤに接近すればルビィの竜魔法は使えない。

筈であったがルビィはお構いなしだった。骨の砕けるような衝撃波がタクヤとビキニアーマー女を襲う。石畳が直径5メートルほど陥没した。普通の人間なら間違いなく死んでいる。しかし二人とも普通ではなかった。竜魔法に抵抗したのである。

「俺を殺す気か？」

タクヤはよろよろと立ち上がった。抵抗することで威力が半減したと言っても衝撃波が至近距離で直撃したのであるズタボロであった。それと対照的なのがビキニアーマー女である。衝撃波で弾き飛ばされたがダメージはないようだ。

「この鎧は魔法を無効化する金属マグネタイトで出来ている。私に魔法は効かん」

言つてのけると剣を構え直した。その時顔を隠していた布がはらりと落ちた。

タクヤは目を丸くした。すごい美人である。だが驚いたのは別の理由である。

「まさか・・・サーシャ姫!？」

その顔は肖像画で何度も見たことがあった。ウッドビレ家とナトリ王家は交流が深いのである。タクヤの生まれ育った家には王族の肖像画が何枚も飾られていた。

女好きのタクヤは特に年若いサーシャ姫の肖像画がお気に入りであった。あらぬ妄想を抱いていた事は公然の秘密である。

「しまった！」

ビキニアーマー女は狼狽すると左手で顔を隠した。

「囲まれてる」

ルビイが周囲を見渡した。言われてみると騎士鎧を着た一団がタクヤたちを取り巻いていた。ざっと30人はいるだろう。戦うことは出来たが王国の騎士と争う理由がなかった。「姫様、もうよろしいのでは」

隊長を示す房飾りをつけた女騎士が進みでた。自分のマントを外してビキニアーマー女にかける。

「そつだな竜神の実力は分かった。竜使いの方は期待はずれだが」
ビキニアーマー女、もといサーシャ姫は急に恥ずかしそうにした。
女らしい仕草で身体を隠すようにマントを手繰り寄せる。

「竜使いタクヤと竜神ルビイ、夕刻までに登城せよ」
隊長格の女騎士が厳かに命じた。

何が何だか良く分からないがタクヤたちの知らない事情がありそうだった。

ナトリ城は荘厳な建物だった。2千年以上の歴史を誇る聖王家の建造物である。

城を訪問したタクヤたちは正門ではなく裏口から通された。曲がりくねった廊下を延々と歩き質素な部屋に通される。

窓のない石壁の作りで中央に味も素っ気もないテーブルが置かれていた。装飾品は何も無い。どうみても客人をもてなすための部屋ではない。

それほど待たされる事はなかった。

扉が開いて昼間会った女騎士隊長が入ってくる。

「サーシャ姫様からお話がある。くれぐれも礼を失することが無いように」

生真面目な口調で告げた。

続けてサーシャ姫が部屋に入ってくる。清楚な白いドレス姿だ。昼間のビキニアーマー女と同一人物とは思えない。

「なぜ私がこんな役立たずの護衛を雇わなければならぬのです。父上を救出するのは私一人で十分です」

いきなりきつい口調で不満を述べた。しかしタクヤたちには事情が分からない。

「どういう事だか説明してもらえますか」

「ああそうだな、これから話すことは極秘だぞいいな」

女騎士隊長の言葉にタクヤはうなづいた。

「実は国王陛下が魔族によって誘拐されたのだ。今はトムス山地にあるヴァルキリーの塔に幽閉されている」

「ええ！？」

タクヤは驚いた。これは国家を揺るがすような大事件だ。

サーシャ姫が不機嫌そうに言葉を継いだ。

「お前もヴァルキリーの塔の伝承は知っているだろう。あの塔にはヴァルキリーの血筋を引いた乙女がそれを証だてるヴァルキリーの鎧を装備していなければ入れないのだ」

「それがあの黄金のビキニアーマーですか」

タクヤの言葉にサーシャ姫は頬を赤らめた。

「黙れ！父上を救うためだ私は何でもする」

「それはおかしい。魔族はなぜ塔には入れた？」

ルビイが疑問を口にした。

「それは分かん。伝承が間違っているのかもしれない。それでお前たちにサーシャ姫の護衛を依頼しようと思ったのだ。大勢の騎士団で押しかけるわけにはいかんからな」

女騎士隊長が難しい顔をした。迷っているのだろう。

「魔族など恐れるに足りません！私が切り伏せます」

サーシャ姫が拳を握りしめた。熱くなる性格のようだ。

「それは無理。相手はおそらく堕天使」

ルビイの言葉に興奮していたサーシャ姫も言葉を飲んだ。

「堕天使ならヴァルキリーの結界も無力化出来る。元は天使だから」

「しかしそれでは……」

女騎士隊長は青ざめた。堕天使についての言い伝えは誰でも知っている。恐れとともに。神に逆らって地獄に落ちたと言ってもその霊

力は天使に等しい。人間が勝てる相手ではないのだ。

サーシャ姫は震えを押さえて気丈に言った。

「まだ相手が墮天使と決まったわけではありません。剣も振れない竜使いの護衛はいりません」

「私がサーシャ姫を護衛する。タクヤはおまけでついてくる」

ルビイが平然と言った。タクヤはがっくりと肩を落とした。最初の勝負で負けてから主として扱われていないのだ。

「好きにきなさい。死にかけても助けてあげないわよ」

「話は決まった。報酬は前払いで1万G、後払いで10万Gだ。ヴァルキリーの塔で見つけた宝物は報酬に含める。国王を無事に救出すればそれ以外にも謝礼が用意されるだろう」

女騎士隊長はテーブルの上に金貨の詰まった皮袋をおいた。すべてメテオール金貨だ。

一般には流通していない高額金貨である。女神メテオールの紋章が刻まれている。レクサンドロス大陸全土で共通で使える。

「いきなり凄い事になってきたな」

タクヤが呟くと聞きとがめたサーシャ姫が柳眉を吊り上げた。

「特に竜使い！足手まといになったら承知しないわよ」

「肖像画で見たときは可憐な美少女だと思っていたのに……」

タクヤが余計なことを言ったのでサーシャ姫の怒りが爆発した。

「こんな時でなければ縛り首よ！王族に対する不敬罪でね！」

「まあまあ、姫様。恐れながら私ももう少し穏やかな話し方をされた方が良いと思います」

女騎士隊長の言葉でサーシャ姫は本格的にぶちきれた。

「まあ！お前までそんなことを言うの？私に剣術を教えたのはお前じゃないの！」

「身を守る術はお教えしましたが殿方を遠ざけるような話し方はなさぬ方が……」

「殿方ですって！私の結婚相手は決まっているわ！ペテルブルク国のニエダ王子よ！私が望もうと望むまいと勝手に決まってる事なの

よ！」

「政略結婚がお嫌なのですか？」

女騎士隊長は気遣うような表情を見せた。

「違うわ。王族ですもの自分の思い通りにはできない。でも今回の事件だけは私のやりたいようにすると決めたのよ」

第三話 墮天使の塔

タクヤとルビイとサーシャ姫の3人がウロボロスの塔に到着したのは城を発つてから7日後の事であった。ホームレス生活の長かったタクヤは早くもばてていた。ルビイはまるで平気な顔をしている。一番心配したのはサーシャ姫だったが歩くことはそれほど苦痛にならない様だった。

「何故みんな私を見るのだ」

サーシャ姫はいぶかしんだ。通りすがりの旅人たちがじろじろとサーシャ姫に視線を送るのである。

「その鎧は目立つ」

ルビイが冷静に指摘した。それはそうだろう高貴な風貌の美女が半裸のビキニ鎧で歩いているのである。目立ちすぎるほど目立っていた。

「サーシャ姫ほど美しい方ならどんな鎧でも似合いますよ」

タクヤは愛想良く言ったがサーシャ姫に殴られた。

「馬鹿者！国王陛下の命が掛かっているのだぞ！真面目にやれ！」
実は旅の間じゅうサーシャ姫の肢体を眺めて目の保養をしていたタクヤであった。サーシャ姫も竜使いが邪な目で見ていることには気がついていていた。

「すべてが終わったら打首にしてやる」

不敬罪で死刑宣告を受けるタクヤであった。

塔の前ですったもんだしているのとゆっくりと鉄の扉が開き始めた。
「簡単に開くのだな」

サーシャ姫が拍子抜けしたような顔をした。ヴァルキリーの資質を問われるような仕掛けがしてあると思っていたのだ。

扉が完全に開いた。しかし内部は暗闇になっていて見えない。

「ランタンが必要だな」

タクヤが荷物を探り始めた。

「ヴァルキリーの子孫、サーシャ姫様ですね。どうぞお入り下さい」
暗闇の向こうから涼やかな若い女性の声がした。

「何者だ？」

サーシャ姫が誰何した。

「ウロボロスの塔の管理人、モロンと申します。サーシャ姫様とその従者の方たちをご案内いたします」

「そうか助かる」

サーシャ姫は疑いも抱かずに塔の中に入っていった。タクヤが止める間もなかった。王族のプリンセスはこうも警戒心が無いのか。

「タクヤ、扉が閉まる」

タクヤはルビイの声で我に返った。鉄の扉は音もなく閉まろうとしている。タクヤとルビイは慌てて飛び込んだ。後ろで扉が閉まる。

塔の中は完全に暗闇だった。

「サーシャ姫どこですか？」

タクヤは大声で呼びかけた。ランタンに明かりを灯す。

「ここでは明かりは必要ありません」

モロンの声がした。意外と近くだ。タクヤは焦ったサーシャ姫のいる場所が分からない。何かがタクヤの足に巻き付いた。又メリとした触手だ。恐ろしい力で締め上げてくる。

「クソツ！ 罨か！」

触手はタクヤを吊り上げた。そのまま壁に叩きつけられる。

タクヤの目の前に白い蠟人形のような顔が浮かぶ。それは口を開いた。真つ赤な口だ。声もなく笑っていた。

「あなた方はヴァルキリーの血脈ではありません。この場で死んでもらいます」

「竜の牙は混沌を砕く」

ルビイが竜魔法を詠唱した。タクヤの足を締め付けていた触手が見えない牙に噛みちぎられる。

「これは珍しい来訪者ですね。竜神族と戦うのは初めてです」

モロンの白い顔は楽しそうに笑っていた。無数の触手がタクヤとルビイを襲った。闇の中では躲き様がない。絡め取られてぎりぎりとして締め上げられた。タクヤは左手で宝剣ライオットをつかんだ。

「雷獣よ敵を滅せ！」

激しい閃光が闇を照らした。宝剣ライオットから走った電撃が触手を焼く。

「珍しい武器をお持ちの様です。しかし無闇に電撃を放つとサーシヤ姫様が怪我をなさいますよ」

塔の入り口の反対側に淡い光が灯った。タクヤたちと同じように触手に絡め取られたサーシヤ姫の姿が浮かぶ。しかしなにか様子がおかしい。顔は上気し身悶するように身体をよじらせている。

「望まぬ来訪者には苦痛を、サーシヤ姫様には快樂を与えております」

よく見るとサーシヤ姫に巻き付いた触手はふくよかな身体を搾り出すように怪しくうごめいていた。

「タクヤ、耐えて」

ルビイが右手を振り上げた。衝撃波がモロンを襲う。詠唱なしで使える竜魔法だ。巨大地震に見舞われた様に塔自体が大きく振動した。超振動で床が砕ける。衝撃波を手加減なしで使っていた。触手が蒸発する様に粉碎される。

「やったのか!？」

タクヤは左手で宝剣ライオットを構えた。モロンの白い顔は消えていた。サーシヤ姫は床に倒れている。

タクヤとルビイはサーシヤ姫に駆け寄った。

「サーシヤ姫大丈夫ですか？」

千切れた触手がサーシヤ姫の身体に巻き付いたままだった。慎重に引き剥がす。触手は口の中にまで入り込んでいた。

「エグイことをされてたんだな」

すべての触手を取り除くとサーシヤ姫が意識を取り戻した。

「悪夢だ……。こんなおぞましい思いをするとは」

「まだ終わっていない。モロンは生きてる」

ルビイが頭上を指さした。10メートルほど上にモロンの白い顔が浮かんでいた。顔を中心に触手が再生している。

「さすがは竜神族。すごい力をお持ちの様です。最上階でお待ちしましょう」

白い顔は不敵に笑いながら上昇していった。

「待て！父上は、国王陛下はどこにいる？」

サーシャの間にモロンが答えた。

「最上階にいます。堕天使アルベル様と共に」

タクヤは戦慄した。やはりいるのか堕天使が。邪神の配下として神に戦いを挑んだ大天使の成れの果てである。ウッドビレ家に伝わっている伝承では邪神と神の戦いは未だに続いていると言う。

ルビイが突然跳躍した。羽でも生えているかのように舞い上がる。

飛び去るうとしていたモロンは虚を突かれた。ルビイの右手が振り下ろされた。衝撃波と打撃が同時にモロンに打ち込まれる。モロンは勢い良く落下し床にめり込んだ。ルビイが急降下して両足で蹴りを食らわせた。こんな時だがルビイのスカートが捲れて生足が顔になるとタクヤは目が離せなくなった。

（俺の竜神はなんて可愛いんだ）

タクヤは殺されかけたことも忘れて陶醉した。12歳（に見える）少女に欲情することに違和感を覚えなくなっていた。

ルビイはモロンの触手をむしり取っていた。次々と再生されるのだがルビイが破壊する方が早かった。モロンの顔を膝で押さえ込みと右手の指を揃えて顔面に突き立てた。そのままズブズブとめり込ませる。モロンは断末魔の悲鳴を上げた。ルビイが右手を引き抜くと黒いクリスタルが握られていた。

「核を取り出した。もう再生しない」

そう言ってクリスタルを握りつぶす。マナの波動が拡散した。強力な魔力を貯蔵していたのだろう。

モロンを倒したことで余裕が生まれた。タクヤが付近を探索して上に登る階段を見つめる。塔の中は完全な暗闇ではなく上部から僅かに太陽光線が差し込んでいるので明るくはないが物の識別ができないほどではない。

「タクヤが先頭、サーシャ姫が真ん中、私が最後尾」

ルビイが階段を登る順番を決めた。誰にも異論は無かったので無言で最上階を目指し始める。階段は塔の内壁に沿って螺旋状に登っていた。それほど巨大な塔ではないのだがかなり歩かなければならなかった。

「もうすぐ最上階」

ルビイが警戒を促す。20分ほど階段を登ったのであるがなんの障害もなかった。拍子抜けするほどである。

「待て竜使い」

サーシャ姫がタクヤを呼び止めた。

「作戦会議をするぞ。この上には墮天使アルベルがいるのだ。無策では死に行くようなものだ」

「……」

ルビイがサーシャ姫の腕を引っ張り首を振った。

「作戦は無い。墮天使には勝てない。国王を無事に返してもらえるように頼むだけ」

サーシャは憤慨した。

「なんだと！戦う前から負けを認めるのか！頼りにならない奴らだ！」

そう言つてタクヤを押し分けると階段を駆け登っていく。止める間もなかった。

慌ててタクヤ達も後を追う。追いついた時にはサーシャ姫は最上階の部屋の扉を開けて飛び込んでいくところだった。

「私はナトリ国のサーシャ王女だ。国王陛下を取り戻しに来た」

口上を述べて剣を抜く。

「結局無策……」

ルビイが部屋に足を踏み入れて呟く。石壁の簡素な部屋だった。天井に明かり取りの窓が開いている。部屋の奥に人影があった。

「父上！」

サーシャ姫が叫んで駆け寄る。ナトリ国王は石壁に鎖でつながれていた。不思議な事にあまり衰弱した様子はない。

「おお、サーシャよ。助けに来てくれたのか」

「今鎖を外します」

サーシャは剣を鎖に打ち付けた。乾いた金属音がして鉄の鎖が切断される。サーシャ姫の剣も強力な魔法の剣であった。

国王と王女は抱き合った。

「すぐに脱出しましょう。幸い堕天使はいないようだ」

タクヤに促されてナトリ国王とサーシャ姫は出口に向かって歩き始めた。

「いいえ。私はいましたよ。あなた方に見えなかっただけです」

美しい女性の声がかして部屋の景色が一変する。石壁が消えて光を放つクリスタルの柱に囲まれていた。その中央に黒い翼の天使が浮かんでいた。淡い光を放つ長衣を着ている。髪は金髪で何故か三味線を持っていた。

「あなた方の時間を止めました。もう動けません」

堕天使アルベルはそう宣言した。

「でも心配しないでください。音は聴こえますし体の感覚も消えていません。しばらく私の楽しみに付き合ってもらえますか？」

誰も答えなかった。堕天使の言葉通り瞬きもできなかったのだ。

堕天使アルベルは三味線を演奏し始めた。

「3ヶ月から練習を始めました。」

確かにそれは3ヶ月間の腕前だった。演奏は延々と続いた。堕天使は飽きる事を知らなかった。

「意外に思うかもしれませんが私は人間が好きです。この楽器も旅人の願いを叶えてそれと引換に手に入れました。その旅人はナトリ国の王になりたいと言ったのです」

墮天使は演奏をやめた。そしてサーシャ姫に近づくと鎧に手をかけた。ビキ二鎧が音もなくクリスタルの床に落ちた。

「サーシャ姫、あなたは美しい。その旅人はあなたに恋をしていたのです」

墮天使アルベルはささやくように言うとサーシャ姫に唇を重ねた。

「私はその旅人を国王にしました」

硬直していたナトリ国王の体に変化があった。頭の横からもう一つの頭が生えてきたのだ。若い男の顔だった。

「肉体を融合させるのは簡単でしたが、これではまだ本当に王になったとは言えません。私は完璧主義者なのです」

墮天使アルベルはサーシャ姫から体を離すとナトリ国王の服を剥ぎとった。

「さあ、国王と契るのです。それで旅人の願いはかないます」

墮天使は再び三味線の演奏を始めた。それが合図であったかの様に二つの頭を持つナトリ国王がサーシャ姫の裸身に覆いかぶさってきた。

サーシャ姫が悲鳴を上げた。両手で異形に変化した父親の身体を押し退けようとする。

タクヤとルビイも動けるようになっていた。

「タクヤ、塔を破壊する。サーシャ姫を連れて逃げて」
ルビイが呪文の詠唱を始めた。

「グランガランの叡智の源よ竜神王の名において命ずる万物を解き放て」

凄まじい閃光が目を焼いた。クリスタルが砕け散る。空間が揺らめいて石壁の部屋が出現した。墮天使アルベルは驚いた風もなく宙に浮いている。サーシャ姫とナトリ国王は傾いた床の上を滑っていた。タクヤは少し迷ったがサーシャ姫の身体を抱き上げて走り出した。ルビイの魔法はウロボロスの塔を完全に破壊した。

「やはり人間は面白いですね」

墮天使アルベルは黒い翼を広げて飛び去った。

第四話 癒しの女神

「いや〜。リジットちゃんは本当にかわいいなあ」

タクヤは山道を登りながら先を歩く美少女に話しかけた。

厳密にはその尻に向かって話しかけたと言っていい。タクヤの視線は美少女の尻に釘付けであった。

「もう〜。タクヤ様、どこを見てるんですか」

リジットと呼ばれた少女は嬌声を上げた。怒っている風ではなかった。

リジットは人間ではない、ルビイと同じ竜神である。亜麻色の髪でおっとりとした風貌である。上は白いブラウスで橙色のタイトミニを履いている。それに加えて大きなポケットの付いたエプロンを着けていた。エプロンがバストを下から押し上げるようになっていて豊かな膨らみをさらに強調していた。

レクサンドロス大陸でもかなり珍しい服装である。竜神族のセンスはよく分らない。

ルビイは黒いホルターネックのミニドレスを着ていた。こちらは普通に見える。タクヤが買いたえた服である。何故かルビイはブラを付けるのを嫌がった。12歳に見える幼い体形なのでつけなくても不自由はなさそうだが乳首が浮き上がって見えるのが難点であった。ルビイはまるで気にしてないのだがタクヤはすごく気になった。

竜神族には特殊能力がある。一日に3分間だけドラゴンに変身できるのだ。その能力を使えば戦闘では無敵である。しかし竜神族は余程の事が無い限り変身しない。理由は簡単である。服が破れるからである。竜神族の服はデザインも奇抜であるが素材も珍しい。水蜘蛛の糸を絹に織り込んだ物であり伸縮性に富んでいる事が特徴である。製法は森の民エルフィル族の職人しか知らなかった。当然大変高価なものであり特注品である。大陸屈指の名家であるウッドビレだからこそ調達出来るのである。

タクヤは振り返ってルビイを見た。タクヤと契約している可愛い竜神である。

「俺にもっと財力があれば……」

ルビイの服は市販品である。上等なものを選んだのでそれなりの値段はしたが普通の服である。タクヤに用意出来たお金ではエルフィール族の特注品は買えなかった。

ルビイはタクヤの目線を受け止めてニッコリと微笑んだ。

タクヤはドギマギとした。

契約の日にこそタクヤを殺そうとしたルビイであったが、それ以降は従順であった。ただし気まぐれで無表情になったり、微笑んだりした。

言葉数も少ないので何を考えているのか読みにくかった。

「タクヤ」

突然ルビイが抱きついてきた。

「何故私を見ないでリジットばかり見ている」

ルビイの身体は柔らかく良い香りがした。

「……」

タクヤは言葉に詰まった。尻に魅了されたとは言えない。

リジットの見た目の年齢は16歳くらいに見える。ルビイよりも色々たわわなのであった。ホームレス時代に工口本を拾い集めて自分を慰めることの多かったタクヤには抵抗し難い魅力を持った生の女であった。

リジットはタクヤと契約している竜神ではない。タクヤの従兄弟のニューメリックと契約している。ニューメリックには三柱の竜神がついていた。いずれも美少女ばかりである。彼女らの活躍は著しくニューメリックの名声を高めていた。タクヤがホームレスをしていた三年間の間にニューメリックはレクサンドロス大陸を代表する勇者として数えられていた。ゴキブリのような生活をしてきたタクヤとは雲泥の差である。

タクヤはルビイの目を見つめて言った。

「ルビイにもいつかリジットと同じエルフィル族の特注の服を買ってあげるよ」

嘘では無かった。エルフィル族の作る服はデザインこそ奇抜だが戦闘服である。攻撃魔法や武器攻撃に耐性を備えているのだ。ルビイがいま着ている服では見習い魔術師の初級攻撃魔法でも穴が開いてしまふに違いない。竜神に着せる服はやはりそれに相応しい物でなければならぬのだ。

「そう、待ってる」

ルビイは小さくうなづいた。

リジットは歩みを止めて待っていた。微笑ましい光景に心を和ませたようだ。

「ニューメリック様が心配してたんですよ。タクヤ様が竜神に腕の骨を折られたと聞いて。でも大丈夫そうですね。そんなに仲がよろしいのなら」

タクヤは曖昧に笑った。右腕が治るのに三ヶ月かかったのだ。墮天使との戦闘で分かったのだがルビイはタクヤを攻撃する時に相当手加減していた。ホームレス生活で身体がなまりきっていたために攻撃を躲せなかったのだ。

タクヤ達が向かっている先は女神ミーテルの神殿である。ミーテルは癒しの女神である。神殿に奉納されているミーテルのリングを使えば無限に回復呪文を使うことが出来るという伝説があった。何故伝説かと言うとミーテルのリングを使ったとされる人物が二千年前の伝説の勇者ミロスだからである。早い話がミーテルのリングと言うのは神器であった。ニューメリックはある秘密の任務で火山島の洞窟へ向かっていた。灼熱の洞窟の奥深くに潜るためにミーテルのリングが必要になったのである。

ウッドビレー族の長老はタクヤとルビイとリジットの三人でミーテルの神殿に向かうように命じた。理由は神託があったからである。ミーテルの神殿の司祭が女神に祈りを捧げてお告げを聞いたと言う

のである。

タクヤは胡散臭い話だと思ったが仕事を拒否することはできなかった。族長の命令が絶対であるという事と、ホームレス生活が長かったせいでルビイに買い与える服も食費も無かったからである。高額の報酬は魅力的であった。

リジットを紹介されたときは幻かと思った。ただ美しいと言うだけではない。タクヤが不埒な妄想の中で弄んでいた理想の竜神のイメージにピッタリだったからである。自分の妄想が具現化したのかと錯覚した。

ルビイは不思議な魅力でタクヤの心を虜にしたが、身体は成長しきっていない少女の物であった。言葉数も少なく性格は掴みきれなかった。それに対してリジットは竜神でありながら人間の女に近い雰囲気を持っていた。そばにいるだけでタクヤの本能が刺激されるのである。

若い情熱が任務を忘れて暴走しそうであった。

タクヤは神殿に続く山道を登りながら妄想していた。リジットのつま先から耳の裏まで体中を舐めまわしたい。妄想は留まる事を知らずタクヤの脳裏を真っ白に焼き切ろうとしていた。危険な状態であった1%の理性が荒れ狂う獣の本能を押しとどめているのである。

妄想の中でリジットは首輪をはめてタクヤの前に跪いていた。かつてタクヤの無二の親友であったエロ本達は彼に黒々とした知識を与えていた。妄想の中でリジットはタクヤの要求することは何でもした。妄想は妄想であるが故に理性の介在する余地はなくタクヤの心を百万の軍勢のように占領していった。

タクヤを致命的な暴拳から押しとどめているのはルビイの存在である。ルビイは初めて会った時からタクヤだけを見ていた。ホームレスをしていたタクヤのどこが気に入って契約する気になったのかは分からない。しかしルビイは汚れきったタクヤの身体に肌を合わせてきた。長い接吻の果てに竜使いと竜神の契約が結ばれたのである。当然ルビイはタクヤにとって特別の存在になった。タクヤに向けら

れるルビイの意識は彼に竜使いとしての立場を認識させるのである。

「あっ！着きましたよ」

リジットが前方を指さした。大理石で出来た神殿が見える。山の頂に近いところに建てられているので大きさはそれ程でもない。100メートル四方くらいだ。入口の所にはタクヤ達の来訪を予感したのか初老の司祭が立っていた。タクヤ達が近づくと深々とお辞儀をする。

「お待ちしておりました。ミータール神殿の司祭アグライヤでございます」

タクヤも礼をした。

「竜使いのタクヤ・ウッドビレです」

「タクヤの竜神ルビイ」

「竜使いニユーメリツクの竜神リジットです」

アグライヤは三人の来訪者を神殿の奥へと誘った。

「ミータール様がお待ちです」

タクヤは少し驚いた。女神ミータール様が顕現されていると言うのだ。二千年前の神々の戦争でほとんどの神は肉体を失った。魂だけの存在になったのである。しかし例外的に肉体を保ったままで神々の戦争を生き抜いた神もいた。女神ミータールもそうである。肉体を持った神は人間界によく現れる。人間の守護者として振舞うことに存在意義を感じているのだと言われている。墮天使が人間界で暴れても大事に至らないのは強力な守護神がいるからである。女神ミータールはそんな守護神の中でも特にフレンドリーな神として知られていた。それ程広くない神殿なのですぐに最深部に着いた。荘厳な女神像の飾られた肅然とした部屋である。女神像の前に金の燭台の置かれた祭壇があった。

突如パイプオルガンが”ミータールの祭典”という曲を奏で始めた。奏者はいない。オルガンが勝手に音を出しているのだ。頭上から金色の光が差し込み、純白の羽根が舞い落ちた。

「ミータール……さ……ま!？」

リジットが呆然と呟いた。

空中に影が現れてすぐに実体化する。純白の長衣を身にまとい白い羽根を持った女性だ。しかし妙なことに顔が赤らんで見える。右手には飲みかけのワインボトルを持っていた。「はう。飲みすぎた。二日酔いです」

空中に現れた女性は落下した。だらしない姿で床に伸びてしまう。長衣の裾がまくれ上がって白い足がなまめかしく露出していった。司祭のアグライヤが大きく嘆息した。

「ミータール様、またお酒をお召しになつていたのですか。程々にしておくようにとあれほど……」

「うるちやいわね！女神ミータール様は飲めば飲むほど強くなるのよ！」

わめいてから裾の乱れに気がついてサツと手で長衣を押さえた。

「見たわね」

タクヤは慌てて首を左右に振った。

「うう」

女神ミータールは妖怪のような声を上げるとヨロヨロと起き上がるうとした。肩の布がズレ落ちて釣鐘のようなバストが半分露出した。桜色の乳首も少し見えている。

美と愛と癒しの女神ミータールは、背德的で怠惰な雰囲気まき散らしていた。神聖にして冒すべからざる女神の乱れた姿を目の当たりにしてタクヤは思考停止した。

「ミータール様。お初にお目にかかります。竜使いニューメリックの竜神リジットです。どうかわが主のために神器ミーターリングをお授けください」

「いいわよ。私の与える試練を克服できたらね」

女神ミータールはワインをラッパ飲みした。

「試練と言つとどのようなものでしょうか？」

リジットは冷静に尋ねた。

「私は美と愛と癒しの女神よ。だ・か・ら・そこにいる男性を癒しなさい」

女神ミートルはタクヤを指さした。

「あのお。癒しとは具体的にはどのようにすればよろしいのでしょうか？」

リジットは首をかしげた。癒しの女神から男性を癒すように命じられることは不思議では無かったが、どうすればいいのかが想像出来なかった。

「フフフ。長く生きてるにしてはウブな竜神なのね。まずはマッサージからよ」

女神ミートルはタクヤに近づくと彼の額に手を当てた。タクヤの身体から力が抜けてうつ伏せに倒れる。次にリジットの手を引いてタクヤの上にまたがらせた。

「身体を密着させて首筋から背中、足の裏までマッサージするのよ」「は、はい！」

リジットは勢い良く返事をする。女神に命じられたとおりに掌と指で指圧を始めた。タクヤはすぐに夢見心地になった。体のこりが取れていくに従ってなにか胸の内で凝り固まっていた物も解きほぐされていく気がした。タクヤは知らず知らずのうちに涙をこぼしていた。感極まったのである。

「タクヤ様！？私になにか悪いことをしましたか。何故泣いておられるのです？」

リジットは不安そうにタクヤの顔をのぞき込んだ。

「いや……。何でも無いよりリジットちゃん。俺幸せだよ」

タクヤは忘我の境地に達しようとしていた。それ程気持ちよかったのである。

「それでいいのです、竜神リジット。続けなさい」

女神ミートルがニッコリと微笑んだ。リジットの癒しの才能に満足しているようだ。

一方、不機嫌丸出しなのはルビィであった。眉根を寄せて黒いオー

ラを発している。

「タクヤの竜神は私なのに」

リジットはタクヤの土踏まずを親指の腹でぐいぐいと押ししていた。次にふくらはぎのツボを的確に押さえていく。太ももをタクヤの腰に密着させて背骨の脇をこするようになすっていく。初めてのマッサージとは思えないほど鮮やかな手並みであった。

「痛いところはありますか」

「痛くないよ。凄くいい気持ち……」

リジットは自信を深めてマッサージを続けた。

首筋から頭部のツボを指圧していく。

「ほわ〜。もう死んでもいい〜」

タクヤはヨダレをこぼしながら目を細めた。

ルビイのこめかみに青筋が浮かんでいた。両手の拳を握りしめてブルブル震えている。爆発する寸前に見える。

「マッサージは出来るようになったのね。それじゃあ次は『ぱふぱふ』よ」

女神ミータールはリジットに耳打ちした。

リジットの顔が真っ赤に染まる。

「そ、そんな事を!？」

「四の五の言わないの。やらないとミーターリングは授けてあげないわよ」

女神ミータールはある意味、墮天使よりもタチが悪かった。弱みにつけ込む術に長けているのだ。

リジットは涙目になって首肯した。

「やります」

エプロンを外してブラウスのボタンを外していく。上から三つ外すと手が止まった。

「ほら駄目でしょ。男性を待たせちゃ」

タクヤは何が起きるのかわからずに呆然としていた。女神ミータールの言葉に促されてリジットがバストを露出する。

「タクヤ様、『ぱふぱふ』させていただきます」

「そんなのダメー!!!」

ルビィがついに爆発した。嫉妬心が我慢の限界を超えたのだ。

右手を突き上げるとかつて無いほどの魔力が収斂した。暴走する魔力が強大な衝撃波を生み出し神殿を破壊した。

タクヤの意識は遠のいたが、かすかに女神ミータールの声が聞こえた。

「合格よ。神器ミーターリングを与えます」

第五話 魔獣マーグトロン

タクヤは竜使いの族長リュウキの家に呼ばれていた。もちろん竜神のルビイも一緒である。

リュウキはタクヤの祖母である。若い頃から優秀な竜使いとして活躍し、レクサンドロス大陸で知らぬ者となない名声を得ていた。名門ウッドビレー族の名を一段と高めたのだ。リュウキは一族の者から慕われていた。

「と言うわけだ。引き受けてくれるな」

リュウキは依頼について語り終わると目の前に置かれたハーブティを口に運んだ。薬草アカナゲを煮出したものである。口当たりが良く甘い香りがする飲み物である。

「古代獣マーグトロンを討伐すればいいのですか」
「そうだ」

レクサンドロス大陸の南部地方にバンクアスという火山がある。付近は溶岩の噴出す灼熱地獄で生物の影もなく旅人も近づかなかった。しかしそこに古代王国時代に創られた魔法生物マーグトロンが封じられていたのである。

一ヶ月前に南部地方で大地震があり、バンクアス山の噴火の予兆かと疑われた。町や村の損害は軽微だったが、本当の災厄はその後訪れたのである。

古代獣マーグトロンの復活！

何らかの原因で封印を解かれた魔獣は人間を襲い暴れ始めた。南部地方を収めているルキアン公爵は幾人も冒険者にマーグトロンの討伐を命じた。

しかしことごとく失敗した。

マーグトロンは強力な魔獣だった。金属鎧を溶かす三千度の炎を吐き、体は岩盤のように硬く刃を通さなかった。生き残った冒険者の証言では古代語魔法まで操るといっているのである。もはや一般の冒険

者に手に追える相手でないのは明らかであった。事此処に至ってルキアン公爵は、竜使いの名門ウッドビレ一族を頼ってきたのである。「安心しろタクヤ。今回の任務にはもう一組竜使いが同行する。それも腕っこきじゃ」

リュウキが白い歯を見せて笑う。彼女の契約竜神のコボルが扉を開いた。

二人組が部屋に入ってきた。そのうちの一人はよく知っている。竜神のリジットである。もう一人は……。

「5年ぶりですか懐かしいですねタクヤさん。先日はリジットがお世話になったそうですね。リジットの主のニューメリックです」

爽やかに笑ってサツとタクヤに手を差し出す。自然に握手をした。

「タクヤ、誰？」

ルビイが訝しい顔をした。無理もないタクヤとニューメリックはよく似た顔立ちをしていた。違いがあるとすればタクヤがワイルドでどこか荒んだ雰囲気があるのに対して、ニューメリックは育ちのいいノーブルな雰囲気を持っていた。

「お久しぶりですタクヤ様」

リジットが花のように笑った。相変わらず胸を強調するエプロン姿である。これは主のニューメリックの趣味であろうか。

「俺の従兄弟だよ。ウッドビレ家の期待の星、天才竜使いさ」

タクヤはニューメリックをルビイに紹介した。

「あなたがタクヤさんの契約竜神のルビイさんですか。強力な竜語魔法を使うそうですね。タクヤさんの事をよろしく頼みますよ」

ニューメリックはルビイにも握手を求めたが、彼女は恥ずかしそうにタクヤの後ろに隠れた。ルビイにしては珍しい反応である。

「タクヤと同じ顔、嫌い」

ニューメリックは少しも気にせずと笑うとタクヤに向き直った。

「タクヤさんとの共同作戦は初めてだね。強力な仲間がいて安心出来るよ」

「うむ。顔合わせも済んだところで時間が惜しい。早速取り掛かっ

てもらおう」

リュウキが話を打ち切って出発を促した。

バンカス山麓に到着するまで5日かかった。馬車を使ったのでこれでもかなり早い。

赤茶けた荒地が広がり、地層から切り出したようなゴツゴツとした岩が転がっている。植物がほとんど生えていない。鼻をつく硫黄の匂いが充満していた。

「これじゃあ、生き物が住めないのも無理はないね」

ニューメリックは白く輝く聖銀の鎧を身にまとっていた。

タクヤの鎧は黒い鋼の鎧である。安物ではないが、聖銀の鎧とは比べものにならない。タクヤとニューメリックの稼ぎの差であった。情報ではこの辺りに地底洞窟の入口があるはずだ」

タクヤは自分に言い聞かせた。

(俺には竜神ルビイがいる。ホームレスをしていた頃とは違うんだ。負けるものか)

気がついたらルビイの手をしっかり掴んでいた。ルビイはきよとんとしてタクヤの顔を見ている。

「タクヤ!？」

「何でもない。早く地底洞窟を見つけて突入しよう」

「張り切ってるね、タクヤさん」

ニューメリックが笑う。

リジットが馬車の中から食料袋を持ってきた。

「探索の前に食事にしませんか」

「はは。それがいいね。リジットの作る料理は美味しいよ。保存食とは思えないくらい」

ニューメリックはタクヤに目配せすると火を起こす準備を始めた。タクヤも手頃な枯れ木を集めてきて手伝う。

短い共同生活だが、同じウッドビレー族の竜使いである。すぐに親しい友人のように打ち解けていた。

ルビイが料理をしたがったのだが、タクヤに止められていた。最初の夕食で肉を炭化させたからである。火力の調節が分かっている様なのだが、それ以外にも調味料の使用目的を把握していない様である。戦闘力は極めて高いのであるが家事は極端に苦手なのだ。しかしそれでもタクヤはルビイの事を愛しく思っつてやまないのであつた。

食事が終わるとそれぞれが手分けして地底洞窟の入口を探すことにした。

「何か見つけたら煙玉で合図してください」
「分かつた」

煙玉というのはケモの実に着火のための油を染み込ませたものである。燃やすと上空高く狼煙を上げることが出来る。レクサンドロス大陸で広く使われている情報伝達手段であつた。

小一時間ほど探すと地底への入り口はすぐに見つかつた。洞窟と言つても天然の物ではない。大理石の石柱で作られた巨大な門があるのだ。人間の身長のおよそ20倍ほどの高さがある。ドラゴンが通れそうであつた。

「この装飾は、古代魔法王国時代のものですね」
リジットが石柱のレリーフを撫でる。表面には不思議な文様が彫られていた。

「奥へ進んでみよう」
ニユーメリックが剣を抜いて先に進む。タクヤ達も後に続いた。

洞窟の奥からは凄まじい熱風が吹き出していた。

「これは早く決着を付けないと、僕たちの体が参つてしまうよ」
「灼熱地獄だな」

タクヤは汗を拭つた。竜神のルビイとリジットは平気そうだ。広い石段が地底へと延々と続いている。降りれば降りるほど、熱風は苛烈さを増してきた。

「どこまで続いているんだ」

不意に階段が途絶えて広間に出た。20メートル四方の石造りの部

屋だ。四方の壁には魔獣が浮き彫りにされていた。蛇のような体にサソリのような頭を持った魔獣だ。

「古代獣マーグトロンのレリーフ……」

リジットが可愛い眉根を寄せた。

魔獣の姿が壁に彫り込まれているのだ。何か仕掛けがしてある可能性が高かった。

「調べてみよう」

ニューメリックが正面の壁に近づいていく。

「タクヤ、嫌な予感がする……」

ルビイが緊張した面持ちでタクヤの腕をつかんだ。

タクヤも緊張していた。ルビイと契約する前までホームレス生活をしていたので、遺跡を探検した経験はほとんど無かった。それでもこの部屋は怪しいと思う。

「畏があるんだろうな」

リジットはニューメリックの背中を守るように寄り添っている。

ニューメリックがマーグトロンのレリーフに触ると突然それが実体化した。

「なに!？」

石壁がバキバキと音を立てて壊れマーグトロンの滲み出してくる。

ニューメリックは剣戟を叩き込んだ。

「クツ! 硬い!」

剣は乾いた音を立てて弾かれた。

「高貴なる光よ、敵を撃て」

リジットが光球をマーグトロンの頭に撃ち込んだ。

魔獣が怯んだ隙にニューメリックが体勢を立て直す。

「囲まれたぞ!」

タクヤは油断なく剣を構えた。

四体のマーグトロンのタクヤたちを取り囲んでいる。凄まじい熱波が襲ってきた。マーグトロンの炎の魔獣だった。

ルビイは衝撃波を叩き込んだ。マーグトロンのサソリの頭が吹き

飛ぶ。頭を失った胴体がのたうちまわっていた。

タクヤは後ろから襲いかかってきた魔獣の腕に剣を突き刺す。

「いけるぞ！ こいつらそんなに強くない！」

「油断大敵ですよ、タクヤさん」

ニユーメリックが注意を促す。確かにこいつらは弱すぎる。必殺の罠にしては迫力がなさすぎるのだ。

「キシヤアアア！」

マーグトロロンが金属をこすり合わせるような声で啼いた。その体が灼熱し始める。床の石畳がドロリと解ける。溶けた石は溶岩となつて魔獣の体に吸収されていった。

「再生してるのか！？」

「来ますよ」

灼熱したマーグトロロンが火球を吐き出した。大きく飛び退いてかわす。

頭を吹き飛ばしたはずの魔獣も復活していた。立て続けに火球を打ち込んでくる。

「こいつら、不死身なのか！？」

「尋常でない再生能力を持っているようだけど、何か核があるはずですよ」

ついに魔獣の体そのものが溶け始めた。四体のマーグトロロンが融合する。

溶けた魔獣は紅煉の津波と化して頭上からなだれ込んで来る。

ルビイの衝撃波が打ち込まれたが、勢いを止めることは出来なかった。

「グアッ！」

既の所でかわしたが、タクヤの足が焼かれた。

「タクヤ様！」

リジットがタクヤを助け起こす。

床に激突したマーグトロロンは、それを溶かし融合していた。再び伸び上がり、タクヤたちを飲み込もうとする。

リジットが光球を打ち込む。

「タクヤさん！」

ニューメリックが飛び込んできた。タクヤとマーグトロンの間に割って入る。

灼熱し紅煉のマグマと化した魔獣はニューメリックを飲み込んだ。リジットが悲鳴を上げる。

「タクヤ、脱出！」

ルビイが全力で衝撃波を叩き込む。マーグトロンの体が震えて、飲み込んでいたニューメリックを吐き出した。

リジットが駆け寄って抱え上げる。

「退くぞ、みんな！」

タクヤは足を引きずりながら出口を目指した。

宙に浮いたルビイが立て続けに衝撃波を打ち込む。魔獣は溶けた身体を変形させながら火球を放ってくる。壮絶な打ち合いになった。

「ルビイ！」

ルビイは最後に特大の衝撃波を送ると、マーグロンが怯んだ隙に逃げ出した。

第六話 不思議な商人

タクヤはニューメリックを担いで灼熱の洞窟を抜けた。

ルビイとリジットも後から続く。今はニューメリックを治療するため安全な場所に避難しなければならない。

「タクヤさんすまない……」

ニューメリックが弱々しい声で詫びた。

「ニューメリック様……」

リジットが青ざめた顔で寄り添っている。

「追っては来ないようだな」

マーグトロンが洞窟から出てくる気配はなかった。

急いで馬車の所まで戻る。一番近くの治療所はルキアーナの町にあった。ここから5日はかかる場所だ。

馬車に乗り込んで北へ向かった。ニューメリックは竜使いとしての強靱な生命力を発揮していた。馬車の中で横たわっていると呼吸が落ち着いている。

タクヤは馬に鞭を当て馬車を急がせた。

一時間ほどゴツゴツとした荒地を疾走すると前方に別の馬車が現れた。

「こんな場所に馬車!?!」

タクヤは十分に警戒する。魔獣マーグトロンが暴れていることはみんなが知っている。このような危険な場所にやってくる旅人がいるとは思えなかった。

それは派手な馬車だった。赤やピンクの極彩色のカラーリングがされている。乗っているのは正常な人間には思えなかった。

派手な馬車がタクヤたちの目前で停まった。よく見ると馬車の側面にサラマンカ商会と書かれている。

「サラマンカ商会!?!」

リジットが馬車から身を乗り出した。

「知っているの？」

「悪徳商人です！」

「悪徳商人とは言ってくれるねえ。そのとおりなんだけどさ。あたしはサラマンカ、行商人だよ。なんでも屋と言った方がいいのかねえ」

極彩色の馬車から妙齡の女性が降りてきた。馬車と同じく暖色系の派手な色彩の服を着ている。何かが狂っているのは明らかだ。

「お困りのようだねえ。力になるよ」
ニヤリと笑う。

タクヤは嫌な予感がした。野生の本能が危険を知らせているのだ。しかし今は助けが得られるのなら、藁にもすがりたい気分だった。

「やけどに効く薬を持ってないのか？」

「あるよ。1万ダルで売ってあげる」

「1万ダル！？ ボツタクリだ！」

タクヤの抗議を笑っていなした。

「お仲間の命を助けたいんだろ。安い買い物じゃないか」

「タクヤ様……」

リジットのすがりつくような目を見て決断した。

「分かった。買うよ」

サラマンカはニヤリと笑った。他人の弱みにつけ込むことに慣れた狡猾そうな目付きだった。

派手な馬車の中から小さな薬ビンを持ってくる。それをリジットに手渡した。

「必ず口移しで飲ませるんだよ」

またニヤリと笑う。

「！？」

リジットはびっくりして頬を赤らめた。しかし重体のニューメリックに飲み薬を与えるにはそうするしかないのかもしれない。

「分かりました。で、でも……唾液とか入って大丈夫なんですか？」

「この薬は唾液と混ざらないと効果を発揮しないんだよ」

サラマンカはリジットの後ろに回ると胸をギューと鷲掴みにした。
「はわわ!? 何をするんですか!」

「あたしの言うとおりにすれば魔獣マーグトロンの炎に耐えるアイテムを売ってあげるよ。女神ミータール様から頼まれてるからね」

「ミータール様が!?」

タクヤは驚いた。

「人間界の守護者だから気配り目配りに抜け目はないのさ。もっともあたしは商売が出来ればそれでいいんだけど」

そういう事ならこの怪しい商人に従うしかなかった。女神ミータールの好意を無駄にするわけにはいかない。

リジットが馬車の中に入ってニューメリックの傍らに跪く。そして薬ビンの中身を口に含んだ。

「リジット……」

ニューメリックが何か言いかけたがリジットの柔らかな唇で塞がれた。

「舌を入れてもいいんだよ」

サラマンカが意地悪そうにニヤニヤ笑っている。

「もう! みんななんで見てるんですか!」

リジットが顔を真赤にそめて身を起こした。

薬の効果はてきめんで、5分ほどもするとニューメリックの真っ赤に焼けていた肌は平常に戻ってきた。

優しく抱き起こす。

「ありがとう、リジット。楽になったよ」

主の微笑に迎えられて彼女の胸は高鳴った。

サラマンカはタクヤに手を差し出した。

「代金をもらおうか、やけどの治療薬とこれから出す耐熱薬の」

「いくらだ?」

「合わせて10万ダル」

タクヤの口が四角になった。

「た、高い!」

「嫌ならいいんだよ。全身やけどでのたうちまわりながら死んでいくがいいさ」

サラマンカは意地悪そうに笑った。タクヤが支払いを拒否しないことを知っているのだ。

「タクヤ様、私が払います」

リジットがエプロンのポケットから青い宝石を取り出した。

サラマンカが手にとって光にかざす。

「上質のサファールだね。いいよ、受け取った」

彼女は上機嫌で派手な馬車に戻り、大きな壺を持っておりた。相応な重量がありそうだが楽に運んでいた。人間ではないのかもしれない。

「これが耐熱コーティング液を人体に塗布するための特別製の壺さ」

ニタアと笑う。弱者をいたぶることに長けた者の顔だった。もちろんタクヤたちは弱者ではなかったが、この場合は任務を果たすためにサラマンカの言いなりになる必要があった。

「タクヤ、これスライムの匂いがする」

ルビイが訝しげな顔をした。

「スライムですか……！？」

「3人ともつとこの壺の近くに集まるんだよ」

言われて従う。壺を取り囲むように立つ。

嫌な予感に極限まで高まっていた。

サラマンカが壺の蓋を開けた。

「うわっ！」

「きゃあ！」

「……！？」

ドロリとしたゼリー状の生物が飛び出してきた。タクヤたちの頭上から覆いかぶさってくる。たちまち全身がスライムの粘膜に覆われた。

「このスライムには、人間の体に耐熱コーティングをする能力があるのさ。おとなしく耐えるんだよ」

そう言われるとおぞましい粘膜の感覚に耐え忍ぶしかなかった。

「タクヤ、服が溶けてる」

「わ、私も！？ どうして……」

「言い忘れてたけど、このスライムには服を溶かして養分にする性質があるんだよ」

サラマンカは楽しくて仕方がないという顔をしていた。畏にかかった獲物を弄ぶ女郎蜘蛛のようであった。

タクヤの目の前でルビィとリジットの服が溶けていった。もちろんタクヤの服も溶けているのだが、そんな事は気にならないほどの刺激的な光景である。

「タクヤ様、見ないでください」

リジットが羞恥に震えながら残った布をかき集めて体を隠した。

しかし無駄な努力にしかなくなっていなかった。豊かなバストもまるやかな太ももからつながるヒップも顕になっていた。

「タクヤ見るな！」

ルビィが後ろから抱きついてきて彼の目を隠した。幼い体型とはいえ絹のようになめらかな肌が、スライムの粘液によってヌラヌラと滑りながら擦り合わされた。

目を隠されたことでタクヤのバランスが崩れた。足を滑らせて前のめりに転倒する。

「ぎゃあー！」

リジットの悲鳴が上がった。タクヤが上からのしかかるように倒れてきたからだ。

「い、ごめん」

慌てて立ち上がるうとするが粘液で滑った。リジットの胸に顔を埋めるようにして突っ伏する。ルビィは逆上して彼の首を後ろから絞め始めた。

タクヤの体は美少女二人に挟まれてヌラヌラとのたうちまわった。

タクヤたちがスライムから開放されたのは、一時間ほどたったか

らである。おぞましい粘膜の中で翻弄され続けた三人は消耗していた。

「よく耐えたね。さすがは竜使いと竜神だよ」

サラマンカは満面の笑みを浮かべていた。大陸でも勇者と讃えられている竜使いの一族を、手の平の上で弄ぶのが楽しくて仕方ないのであった。

「新しいコスチュームを用意しておいたからね。これに着替えるんだ」

「こ、これ……」

リジットが息を飲んだ。

手渡された物は細長い金属を編み合わせたビキニ鎧だった。しかし金属の間には隙間が空いていて身体を隠せそうにない。

「その耐熱コーティングは布に触れると効果がなくなるのさ」

サラマンカは腰に手を当ててふんぞり返った。

「今なら特別に安くして、3万ダルで売ってあげるよ」

ルビィはためらいもなく装着していた。

「タクヤ、似合うか？」

似合わないとは言えなかった。しかし幼い体型のルビィに露出の大きいビキニ鎧は合わない。

リジットも大きなため息をついてから鎧を装着した。少しサイズが小さいらしく鎧の隙間からムツチリと肉がはみ出していた。

タクヤは装着するのに苦勞した。鎧が股間に合わなかったからである。

第7話 アルベルの紋章

タクヤたちは再び古代遺跡の入口の前に立っていた。内部からは凄まじい熱風が吹き出してくる。魔獣マーグトロンが立てこもっているのは間違いなかった。

「ニューメリック様に怪我を負わせた魔獣を絶対に許せません！」
リジットが左手を腰に当てて、右手の人差指を突き出した。相当、怒っているようだ。

「あつ……」
タクヤの視線に気がついて両手で胸を隠す。頬がみるみる紅くなる。

「そんなに見ないでください……。恥ずかしい……」
タクヤたち三人は謎の行商人サラマンカから売りつけられた鎧を身につけていた。ただしそれは鎧と呼ぶには無理のある代物で、ほとんど体を覆う役割を果たしていなかった。細い針金が組み合わさった工芸品のようなものである。

「タクヤ！ リジットを見るな！ わたしを見る！」
ルビイが飛び掛ってきて彼の首をひねる。ゴキリ！ と言う音がした。

「!?」
「タクヤが声もなくうずくまる。
「タクヤの竜神はわたしだぞ！ わたしだけを見て、わたしのことを考える！」

そう言いながら手足を絡ませてくる。彼の竜神が幼い少女の姿をしていなかったら理性が崩壊していただろう。

「タクヤ、きつそうだな……。脱いだほうが良くないか？」

彼の鎧を撫で回してくる。鎧は大事な部分しか覆っていないかった。防御力があるとは思えない細い金属が絞めつけてくるのだ、動きにくかった。

しかし、彼には竜使いとしての矜持がある。全裸で魔獣と戦いたくなかった。

「タクヤ様になら少しは見られてもいいです……。でも、あまりたくさんは見ないください……」

リジットが両手を胸の前であわせて祈るような顔をした。唇を少し引き結び、頬を染めている。目が潤んでいた。

「お前はニューメリックの竜神だ！タクヤに色目を使うな！」

「色目なんか使っていません！」

両手を広げて抗議する。無防備になったバストが目の前でブルンと揺れた。

大事な部分に血が集まってきたタクヤはうずくまった。

(この鎧、外してしまいたい……)

「楽しそうにしていますね」

涼やかな声が頭上から響いた。

太陽を覆い隠すように黒い翼が広がり、黒衣の女性が降り立つ。

神々しい金髪がふわりと揺れた。人間離れた美貌が神秘的な微笑を浮かべている。

「おまえは！？墮天使アルベル！」

以前、ウロボロスの塔で遭遇した強敵であった。

ルビイの眉が釣り上がる。腰を落として衝撃波を放てる体勢になった。

リジットは魔法杖ルミナージを構えた。

「なぜお前がここに!？」

タクヤの間にアルベルは不思議な表情を見せた。

目をそらして小さく溜息をつく。ゆっくりと眼を閉じて開いた時には彼を流し見た。

「貴方に逢いたかったから……」

そっと恥じらいの表情を浮かべる。

「……」

ルビイがアルベルに飛びかかった。怒りに我を忘れているのだ。

「ホホホ。オチビちゃんは気が短いのね」

墮天使が両手を広げると黒い炎がルビイを包んだ。失速して墜落する。そのまま動かなくなつた。

「ルビイ！」

タクヤが駆け寄るが届かなかつた。アルベルが彼の両肩をつかんで地面に押し倒したのだ。そのまま馬乗りになってくる。すごい膂力だつた。

リジットが杖を突き出す。光弾が放たれたが命中する直前にはじけて消えた。

「……………すごくたくましい……………」

うつとりと笑い、長く伸びた爪でタクヤの胸板をひつかいた。筋を引いて血が流れる。

「ううっ……………」

低くうめいた。傷口から信じられないような快感が襲つてきたのだ。

アルベルは両手の指を使って細長い傷を刻んでいく。

「ああ……………」

タクヤの口から女のような喘ぎ声がこぼれた。どのような魔力によるものか推し量るすべはないが、傷口からもたらされた快感は、彼の脳を焼ききつていた。

立て続けに精を放つ。

「タクヤ様！ 大丈夫ですか！」

リジットがルミナージの先端に魔力を集中させてアルベルに殴りかかる。

「フフフ。可愛い攻撃ですね」

墮天使はリジットの胸を鷲掴みにすると、そのまま腕を振り上げた。鎧の胸が砕け散る。黒い炎に包まれて地面に叩きつけられた。

「ここから先は魔獣マーグトロンの出番ですね」

黒い羽を優雅に羽ばたかせて宙に飛び上がる。

大地震が起こる。

大地が裂けて溶岩が吹き出した。古代遺跡の入り口はたちまち崩壊する。岩盤がささくれだったかさぶたのようにそそり立った。地割れに飲み込まれないようにするだけで精一杯だった。

吹き上がる溶岩の中から魔獣が姿を現した。

以前にも増して禍々しく見える。

「魔獣を倒して墮天使も成敗します！」

魔法杖ルミナージを構える。黒い炎のダメージから回復して魔力が増幅される。

「タクヤ、立てるか？ 来るぞ！」

「ああ！」

魔獣は溶岩を吸収して熱量を上げている。体の色が赤から白へと変化する。太陽を見ているようであった。

「耐熱コーティングを信じるしかないのか」

宝剣ライオットを振るう。馬の胴体ほどもある雷撃が放たれた。

魔獣の頭部に命中する。

白熱した溶岩が血液のように飛び散った。ルミナージの一撃を加えようとしていたりジットに降り注ぐ。しかし体表で弾かれてダメージはなかった。耐熱コーティングは効果を発揮しているようだ。

ルビイがリジットの後ろから飛び出す。接近して衝撃波を打ち込んだ。

マーグトロンの姿が膨れ上がる。口から炎を吹き出した。タクヤはかなりの圧力を感じたが、熱さはなかった。

「タクヤ様！ 私が道を作ります！」

マーグトロンの正面に立って障壁を張った。

「助かる！」

ルビイが魔獣の右足を吹き飛ばした。巨体が大きく傾く。

飛び上がって宝剣ライオットを振り下ろした。

「キシヤアアア！」

魔獣マーグトロンは断末魔の叫びを上げて倒れた。その体はドロ

ドロと溶け崩れ、地割れに飲み込まれていく。

タクヤは宙に浮かんでいる堕天使アルベルに剣を突きつけた。

「次はお前の番だ！」

「あら！？ 困りましたね。戦いに来たのではないのですが」

アルベルが両手を付きだすと黒い炎が出現した。

「黒蛇の紋章よ彼の者の願いを叶えよ」

低く呪文を唱えると、炎は黒い蛇の姿になった。

「竜神ルビィ。貴方の願いを聞き届けました」

蛇が矢となってルビィの胸を貫いた。

「ガアッ！」

胸を押さえて倒れた。

「ルビィ！」

駆け寄って助け起こす。タクヤの腕の中で少女の身体に変化が起きていた。

手足がスラリと長さを増す。胸も膨らみ始めていた。苦しそうに悶えながら大人の身体になっているのだ。

「ルビィに何をしたの？」

リジットが険しい顔で魔法杖を突きつける。

堕天使は静かに笑っていた。

「私は願いを叶える者。その竜神の少女が欲しがっていた物を与えたのです」

ルビィの身体は二十歳ほどのふくよかな体型に変化していた。

「またどこかでお会いしましょう」

黒い羽を大きく羽ばたかせると、忽然と消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9561m/>

ルビードラゴン

2010年10月13日02時21分発行